

# 武徳編年集成

八十九  
九十

内閣文庫			
和	一五二五〇	五〇	一七三函
書	號	冊	架

内閣文庫			
和	一五二五〇	五〇	四九函
書	號	冊	架

内閣文庫		
番號	和	15250
冊數	50 (49)	
函號	149	115



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





武德編年集成卷之八十九

元和元乙卯年

九月小

木村高敦 撰

淺草文庫

○朔日御陣御供ノ諸士昨日迄休暇ヲ得テ今日ヨリ  
勤仕ス○七日九鬼長門守ヨリ大坂ノ亡虜喜多十左  
衛門ガ關所荷金三十枚ヲ官庫ニ收ムト云ニ○八日  
東武ヨリ水野監物參候ノ處大坂戰場ニテ見前ノ族  
糺明アルカノ由御尋アリ忠元近日入札ヲ成サシメ  
昇ヲ糺サルベキ御沙汰ノ由言上ス○九日 大樹ノ  
御名代水野監物ヲ始メ諸臣悉ク登營メ重陽ノ賀ヲ



述ル今晚御數寄屋へ日野輝資卿入道唯心大澤少將  
基重畠山長門守義貞土岐左馬介賴勝同市正持益三  
好因幡守一任堀田若狹守重氏堀丹後守直寄市橋下  
總守長勝猪子内匠介ヲ召テ尾張義直卿火炮ヲ以テ  
獲ラル、處ノ白鳥ヲ御料理有テ是ヲ賜リ且又志智  
ノ壺ノ喫茶ヲ點メ是ヲ賜ト云、○十日松平忠左衛  
門勝隆後出雲越後ヨリ歸參シ忠輝朝臣并ニ老臣陳  
謝ノ據ナキ旨言上ス先達テ駿府ノ執事ヨリ密旨ニ  
依テ忠輝朝臣罪ヲ謝スベキ爲高田ノ城ヲ發シ上州  
藤岡ニ至リ蟄居セラル○十七日東武ノ御使神尾刑  
部少輔登營シ近日坂東ノ地御放鷹トメ御出興有ン

由其々 台德公御喜悅ノ旨ヲ述ル○十九日御鷹ノ  
捉ル鶴ヲ以テ日野唯心入道并ニ安西衆ヲ饗シ玉フ  
○廿三日金森長門守重賴家督相續ノ御禮トメ銀二  
千兩其弟内匠頭可次左京重勝各銀百兩ヲ捧グ重賴  
亡父ノ遺物トメ刀國次脇差正宗且茶壺ヲ獻ズ追テ  
台德公ヘモ脇差吉光及小柴肩衝ヲ父ノ遺物トメ獻  
上ス程歷テ後 台德公重賴ヲ召テ彼肩衝汝が家寶  
トスベキ旨ヲ仰フレ御前ニ於テ返シ賜ト云、○是  
日小野左馬介高政享年五十八歳ニメ卒ス○其日酒  
井雅樂頭忠世青山伯耆守忠俊土井大炊頭利勝ヲ  
竹千代君ノ元老トメ附屬セラル旨武陽ヨリ羽檄到



來ス○廿四日東武ノ羽書到來當廿一日毛利秀就が  
櫻田ノ宅ヨリ失火ノ伊達島津鍋島ノ營類焼スト  
○廿九日駿城ヲ出興有テ清水ニ着御

十月大

○朔日未ノ刻善徳寺ニ 着御爰二翌日モ御滯座也  
○三日三島ニ至ラセ玉フ○四日小田原ノ城ニ 着  
御東武ヨリ安藤對馬守重信等箱根山ニ至リ迎へ奉ル○五日相州中原ニ 着  
御爰二數日也○九日神奈川ニ 着御此所迄 台徳公  
迎セ玉ヒ先達テ 還御ト云ニ○十日 神君武江へ  
着御有ベキニ依テ 竹千代君家光公也國丸君駿河忠幸公也  
橋ノ内迄是ヲ迎へサセ玉フ然ル 神君西ノ丸へ入

御 台徳公本城ヨリ渡御御對顔アリ○十三日 神

君ノ 命ニ依テ最上駿河守家親ハ俄カニ其庶兄大

藏少輔義成領二萬七千石居城清水へ山形ノ城ヨリ兵ヲ

發シ鑒ニス是ハ義成密ニ秀頼へ興スルヲ露顯スル

故也義成が子孫一郎時二十山形ノ屋敷ニ在ケルガ

是ヲ聞テ三百餘兵ヲ率テ山形ノ城門ニ押寄悉ク戰

死ス殘黨三十餘人ハ屋敷ニ籠リ居テ家親が臣木戸

周防等が攻來ルヲ待テ或ハ討死シ或ハ自殺スト云

○十五日 神君ヲ江府ノ本城ニ於テ御饗應アリ

○廿一日 神君戸田ノ邑へ 渡御是ヨリ日ニ鴻

巖恐岩附邊御放鷹有ベシト云ニ○廿三日三宅宗右



衛門康貞入道享年七十二歳ニメ卒ス參州以來忠勤ノ人也其子ハ越後守也○廿四日 台徳公ヨリモ幕下ノ士大阪表ニテ逃崩ルノ族見及趣入札スベシ最モ私ノ宿意依悋最負スベシラザル由起請文ヲ書シムラル○廿五日 台徳公右ノ入札ニ上覽則 神君ノ御旅營ヘ獻セラル今度永井右近大夫部下ハ一巳ノ吟味ニ依テ剛臆ヲ決セラル是人文武ヲ兼備シ出テハ將トシ入テハ宰トスベキ度量アル故也

十一月小

○二日 台徳公鴻巢邊御放鷹アリ嚮二井伊直孝ニ賜フ加恩ノ地ノ御朱印ヲ授ケラル

今度乙卯六月一戰之刻拙軍忠勵戰功其以類働志以神妙之至也為是賞以萬石<sub>別紙</sub> 宛行之訖先知行十萬石<sub>別紙</sub> 合二十萬石<sub>別紙</sub> 其相違可令領知之狀此件

元和元年十一月二日

御朱印

井伊持邦頭取

○九日 神君岩槻ニ放鷹セラル 台徳公ハ鴻巢ヨリ江城ヘ 還御○十日 神君越谷ニ 度御ノ處其地ニ水溜リ放鷹ノ妨ニ及ブ故此所ノ租稅ノ吏御氣色ヲ蒙ル是ヨリ萬四千葉東金ノ地ニ放鷹シ王フベシト云ニ乘興ノ婦子三人馬上ノ婢十八人且蜂屋力



郎左衛門が輕卒五十人扈從ス○十六日 台徳公船  
橋へ 渡御是ヨリ估倉ノ邊御放鷹ト云ニ○十九日  
台徳公ノ御使太田備中守資宗 神君ノ東金ノ御旅  
營ニ主ル處新井ノ下坂康繼カ刀ヲ賜フ○廿三日  
台徳公江城へ還御○廿五日 神君再ビ船橋ニ放鷹  
シ玉フ處丑ノ刻ニ驛舎焼亡スト雖御旅營災ヲ遁ル  
○廿六日葛西ニ放鷹ヒラル○廿七日酉ノ刻 神君  
武城四ノ丸ニ 還入シ玉フ秉燭ノ後本多佐渡守正  
信モ既ニ當秋ヨリ老疾ニ沉ムト雖モ今日適ニ快ニ  
依テ侍ニ應ジ登營メ暫ク御前ニ伺候ス○廿九日  
神君來歲駿府ノ城ヲ參議中將頼宣卿ニ讓ラセ玉フ

ヘキニ依テ御幽栖ノ地ヲ撰ンテ城郭築營アルベシ  
豆州三島邊然ルベキ歟ト御沙汰アリ○是日 台徳  
公自今以後諸國へ三箇年ニ一度ヅミ監察ノ使節ヲ  
遣ハサレ諸牧等政道ノ邪曲庶民ノ艱苦ヲ問ハルベ  
シ天下既ニ平均スルハ早速諸州大名居城ノ外枝  
城ノ畧破却スベキ由委細ノ制令ヲ施サル然レ氏興  
州會津領ハ元ノ如ク數箇所枝城ヲ差置レ今年蒲生  
家ノ監使トメ豐島主膳信滿永田庄左衛門正利ヲ遣  
シ玉フ

○按ルニ此後元和四戊午ニハ會津表へ跡部民部  
良保今村傳四郎正長ヲ遣シ玉フ同六庚申ニハ會



我喜太郎右祐神尾内記元勝ヲ監使トセラル此監使遣ハサルハ蒲生下野守忠郷幼弱故也

十二月小

○朔日青山伯耆守組今村傳四郎正長ヲ神君ノ御前ニ召テ當五月七日ノ軍功御稱美ノ餘リ梶原景時ガ二度ノ蒐モ其子源太ヲ助スベキ爲也汝カ二度ノ蒐ハ近藤カ馬ヲ返サント義ノ爲ニ成ス處ニメ梶原ニ優ル事遙也汝ハ一騎當千ト云ベシト上意有テ御着用ノ胴服ヲ御手自ラ是ヲ賜フト云ニ

○今村家傳ニ正長ガ父彦兵衛重長ハ御使番ニテ千二百七十石ヲ領シ今度加賀ノ隊ノ軍監トメ功

アリ翌丙辰ノ年千石ノ忠賞ヲ蒙リ寛永四丁卯ノ五月卒去ス傳四郎正長ハ當月下旬千石ヲ賜フ自巳ニ取來ル三百石ニ合ヒ領シ父重長死メ其高ヲ加ヘ賜リ二千六百石ヲ領シ豆州下田ノ海口ヲ守衛スト云ニ○又曰傳四郎正長ガ戰場ヘ構ヘシ十文字ノ槍ハ夏日次郎左衛門吉信ガ味方原軍ノ時粉骨ヲ盡シ相働神君二代テ忠死セシ刻ノ持槍也次郎左衛門カ子長右衛門信次ハ傳四郎ガ伯母婿也ケルカ正長ガ生質名譽ノ武功ヲ成スベキト稱シ父吉信ガ槍ヲ譲リケルガ果メ拔羣勇名ヲ顯スト云ニ



○三日 台德公本城ヨリ西ノ丸へ 渡御 神君へ  
謁シ玉フ本多佐渡守侍座ス○四日 神君秘毛へ  
渡御翌日ニ至リ放鷹シ玉フ物貝寡カラズ御喜悅斜  
十ヲズト云ミ○六日 相州中原ニ赴カセ玉フ然ル處  
辰ノ刻ヨリ大雪降テ供奉ノ中凍死ニ及ブ者アリ日  
和惡シキ故數日はニ御滯座ト云ミ○十四日 台駕  
豆州三島ニ至ル○十五日 吉辰ニ依テ御退隱ノ土地  
泉頭 三島西方御巡視有リ來春御繩張有ベキ由ニテ未  
駿州喜德寺迄御駕ヲ旋ラサル是日江都ニ於テ 台  
德公ヨリ往日藤堂高虎ニ采邑ヲ増封セラレシ印章  
ヲ賜ノ

今度於大坂表八月六日合戦ニ刻抽軍忠勵戰功  
無比顯勳を以神妙也因茲為其賞を弟名宛行之  
詔 本知 本知二十萬九百五十石都合二十萬九百  
五十石餘るを御還金で令知行老也

元和元年十二月十日 所兼印

後堂和泉寺

○十六日 神君駿府ノ城へ還御アリ賴宣卿清水迄  
出迎ヘ玉フ○十九日東武ヨリ節分賀儀ノ使節トメ  
上井大炊頭駿府ニ登城シ且 台德公ノ仰ニ豆州泉  
頭勝也タル由欣然斜ナラズ來春江府ヨリ彼表ニ城  
郭殿舎經營セラルベキ旨ヲ演說ス○二十五日江府



ヨリ歳末ノ佳儀ノ使節神尾州部少輔駿府ニ登營ス  
○廿六日大坂表ニテ戦功一番格ヨリ崩際ノ功名並  
詳ニ會議ヲ凝サレ檢合馬人ノ證據ヲ糺シ抽賞アリ  
千石  
○十五百石  
山田十大夫重利  
五百石  
渡邊半十郎宗綱  
五百石  
川口長三郎正武  
五百石  
中山勘解由昭守  
五百石  
菅沼王殿定吉後改田中  
五百石  
服部權大夫政信  
今度政信ガ父政光卒去遺領三千石ニ合ヒ

ヨリ惣テ三千五百石ヲ領ス  
四百石  
石谷十藏貞清

勘解由長男

四百石  
中山介六郎直之

四百石  
小栗平吉久玄

三百石  
間宮權左衛門伊治

御小姓御手水番

四百石  
安藤其助

三百石  
同 喜多見半三郎重恒

三百石  
同 八木勘十郎宗直

三百石  
同 藁科孫九郎



同御日付兼役

二百石 木村源太郎元政

源太郎嫡子此時迄無祿

二百石 同甚九郎勝元

大御番阿部備中守組與頭

五百石 坪内五郎左衛門利定

五百石 同 大久保新八郎忠村

二百石 同 近藤權左衛門正吉

大御番高木主水正組

五百石 山田清太人重次

五百石 兼松彌五左衛門正直後下總守二任

五百石 渡邊半六郎直綱後改六左衛門任下總守

志摩守一豐嫡子此時迄無祿

五百石 高木忠右衛門為信

五百石 金田宗八郎正吉

三百石 寬助兵衛為春

三百石 權田小三郎為清

三百石 小笠原久左衛門正直

三百石 高木茂右衛門

三百石 近藤金藏後改忠右衛門

伏見在衛大御番

二百石 加藤傳兵衛正信



此正信陣場割ヲ勤メ且市橋下總守長勝隊ノ  
監使トメ矢尾ニ於敵徒ヲ搦捕故此ノ如加恩  
アリ且組頭ニ命ゼラル

御書院番水野隼人正組

千石 水野多宮守重

千石 天野佑左衛門雄得

千石 東惣右衛門

千石 横田五郎三郎

千石 赤見猪右衛門

千石 平井文右衛門

二千石 土方宇右衛門勝直

此勝直ハ加藤嘉明金吾秀秋ニ歷仕メ勇名ヲ  
顯シ頃年麾下ニ列シ今以無祿ニメ勤仕ス今  
度二千石之内五百石ハ一列ノ勲功ノ賞ニメ  
千五百石ハ金吾家ニ在シ時ノ先知ト稱シ是  
ヲ授ケラルト云々

五百石 三木十郎兵衛近綱

五百石 本郷庄三郎勝吉後改庄右衛門

五百石 堀田勘左衛門正利

五百石 柴田三左衛門

五百石 齋藤左源太利政

二百石 天野權十郎光則



此光則ハ無祿ニメ父佐左衛門ト氏ニ出陣シ  
功名セシ故新知二百石ヲ玉フ家督ヲ繼テ後  
佐左衛門ト改

千石 御書院二番青山伯耆守組  
大久保四郎左衛門忠成後任

千石 中根傳七郎正成後任太

千石 高木善次郎後任肥前守  
今村傳四郎正長

五百石 松前隼人忠廣  
安藤傳十郎定智

五百石 口茂右衛門宗重

五百石 花房又七郎正榮後改右  
大久保牛之介長重後改甚

五百石 此時迄無祿ニメ新地拜領也  
井戸左馬助良弘

千石 御書院四番松平越中守組  
戸田藤五郎重宗後任備

五百石 同 駒井右京親直

三百石 同 駒井次郎左衛門昌保

山多齋叢書 我意編 卷八十一



御花畑一番水野監物組

五百石 松平五左衛門正吉

此正吉八五左門近正吉二也慶長十七壬子

以來無祿二テ勤仕ス新々二是ヲ賜フ

三百石 同 石九槽六郎

三百石 同 朝比奈宗一郎泰澄

御花畑二番井上主計頭組

五百石 土屋左門知貞後改忠兵衛

四百石 同 山崎權八郎

三百石 同 岡部庄九郎長綱

御花畑三番板倉周防守組

四百石 稻垣藤七郎重大後任若狹守

四百石 同 彦坂平六郎重定

二百石 同 高田庄右衛門

御花畑四番成瀬豐後守組

三百石 中山内記信吉後任市正

三百石 安藤與八郎

○安藤仁左衛門有重未ダ無祿二テ天王寺表ノ軍功

牧野駿河守證據ヲ糺シ言上メ御書院番二列シ采邑

別メ是ヲ賜フ後江府町司石見字是也此人父祖以來三代假名官

名相同ジ皆仁左衛門有重ト云ヘリ○難波戰場二テ兄朋ノ節逃

亡セシ族改易セラル其姓名左ニ記ス

御花畑三番板倉周防守組



御書院番青山伯耆守組 御書院番水野年人正組

村越内藏介

土橋孫六郎

佐久間孫四郎

杉山三右衛門

青山五郎

堀田清十郎

青山小兵衛

○本多傳三郎西山清三郎モ右ノ連坐ニテ改易セラレケルガ後ニ兩人誤リナキ中披キ歸參スト云ミ  
○御膳番ノ御扈從假ノ御使番田上右京進秀行山上彌四郎モ見崩レノ刻御後備破籠篠筒等ノ糧ヲ荷雜卒ノ中へ來入多ク踏タラシケル中沙汰有テ蠶糸シ大竹郷右衛門正重ニ據テ是ヲ謝シケレ其趣不分

明故祿ヲ棄テ去ル然ニ田上ハ大坪流ノ馭法ヲ習熟シ奥州岩城ニ往テ其術ヲ以テ鳴ル山上ハ寛永年中肥前島原ノ役ニ松平信綱ノ備ヲ借り忠戦ヲ遂テ歸參ヲ許サレント欲シケルガ不運ニメ陣營ヨリ失火シ空ク歸陣メ後其終ル所ヲ知ラズ此兩士ハ元江州ノ産也○青山善四郎重長ハ制令ヲ背キ拔蒐ニ功ヲ顯スヲ以テ改易セラレ後恩免ヲ蒙ル○石川嘉右衛門重之ハ三州泉ノ庄ノ産ニテ神君へ昵近シ儒學ヲ好デ螢雪ノ功ヲ勵シ殊ニ詩ヲ賦スル中巧ナリ然レモ氣象豪放ニメ同輩ニ憎疾セシレ怯弱ノ汚名ヲ得蟄居シケルガ今度ノ軍ヲ幸トメ出陣シ御諒ヲ



并キ櫻ノ門迄先蒐シ首ニ級ヲ得ルト雖モ制令ニ違  
フ罪ニテ改易セラル後年老母ヲ養ハシ爲ニ藝州ニ  
客トノ祿ヲ得ル淺野長晟没後彼國ヲ去テ洛陽四明  
ノ麓一衆寺村ニ至テ幽栖ノ庵ヲ結ベリ十坪又十二  
畧ノ眺望有テ六六山人丈山下號シ中朝ノ詩仙三上  
六人ヲ擇デ額ニ畫キ且其詩ヲ書テ壁ニ掲ケ其堂ヲ  
詩仙堂ト云ヘリ誓テ二十年市ニ臨マズ 後水尾帝  
渠ヲ 仙洞ニ召ト雖モ辭メ 院參セズ其瀬見ノ小  
川ノ和歌人口ニ噂炙ス○御旗奉行保坂金右衛門御  
押前ニテ旗ヲ擾シ士卒ヲ疑惑有ラシムル故改易セ  
ラル 後年免許ヲ ○假御槍奉行永田善左衛門重利同

少坐有テ閉門シケルガ免許ナキ内ニ卒去シ家斷絶  
ス○八王子千人頭ハ甲陽武功ノ士也今度虎革抛鞘  
ノ御數槍ヲ歩卒ノ族ニ渡シ仕形宜ク加恩五十石宛  
是ヲ賜ハルベキヤ常座ノ賞トメ白銀ヲ授ケラルベ  
キヤ御尋ノ處當時資料逼迫シ白銀ヲ願テ二十枚宛  
ヲ拜領ス其中ニ志村勘左衛門貞時ハ五十石ノ常祿  
ヲ願望メ速ニ拜領ス○廿七日大坂ノ質子大野彌十  
郎 修理 速見出來丸 甲斐 且古田山城守 織部正 江府本  
誓寺ニテ誅セラル村上周防守頼勝ガ大坂屋敷ノ衛  
守富田次左衛門モ敵方ヘ内通ノ由露顯シ周防守ニ  
告テ是ヲ誅セラル○爰ニ 台德公ノ近臣小山長門



守成瀬豐後守正武ハ軍功有卜雖モ生害ス是兩人斷  
金芝蘭ノ友也當閏六月廿一日御參内ノ時各供奉  
シケルガ豐後守妻ハ伊東修理大夫祐慶カ妹ニメ其  
縁族官女ニ數多有ル故豐後守ヲ閨房ヘ呼入テルニ  
依テ正武則長門守ヲ攜ヘ往テ冠ヲ脱テ杯酒ノ興ヲ  
催ス小山ハ姿色ノ譽有ル故壯歲ノ女孀餘多出テ奔  
走セシヲ遙カ後ニ駿府ニ漏聞スルニ因テ豐後守ヲ  
バ土井利勝ニ預ケラレ享年ニ十二歳ニメ新知恩寺  
ニ於生害朋友井上清兵衛政重介錯ス長門守ヲバ安  
藤重信ニ預ケラレ吉祥寺ニメ自殺朋友細井金兵衛  
勝吉介錯ス○廿八日所庄主殿直好島田清左衛門直

時各從五位下ニ敘シ兩人凡ニ越前守ト稱ス○廿九  
日來元旦ノ出仕ヨリ駿武氏ニ諸臣其官位ニ隨テ烏  
帽子狩衣大紋タルベシ平士素袍勿論タルベシト云  
ニ○是日小野傳三郎高行始テ登管シ台徳公ヘ拜  
謁ス○是年難波ノ軍功ニ依テ内藤帶刀忠知ニ一萬  
石ヲ加ヘ玉フ都合ニ萬石ヲ坂崎出羽守成正ト本多  
大隅守忠純ニモ一萬石宛ヲ玉フ坂崎ハ本知石州津  
和野共ニ四萬石本  
多ハ本領野州長沼  
共ニ二萬八千石也本多能登守忠義ハ美濃守忠政カ  
三男ニメ未ダ無祿ノ處ニ萬石ヲ賜リ同苗出羽守正  
胤ハ上野介正純カ二男ニメ是モ無祿ナリシガ一萬  
石ヲ封ゼラル保科甚四郎正貞ハ兄ノ養子タリシカ



其不和ニ又忍テ戰場ニ至テ大功ヲ顯ス故三千石ヲ  
授ラル後暉正植村新六郎家貞山羽守ニ五千石ヲ加  
ヘ賜フ○成瀬伊豆守之成ハ父隼人正ガ本知一萬千  
石ヲ賜リ永ク幕府ニ奉仕スベシト云ミ是ハ父既ニ  
尾陽義直卿ノ輔臣タリト雖今年迄ハ神君ニ御テ  
政ヲ沙汰スル處ニ漸シ尾州犬山ノ城ヘ移リ嫡子半  
左衛門正虎共ニ尾州ノ政務ヲ執ル依之隼人正正成  
ガ舊知ヲ伊豆守ニ授ケラルト云ミ之成寛永十一甲戌年三十九歳ニ  
メ率シ家斷絶ス○内藤豐前守信政紀伊守江州坂田郡長濱  
ノ城地ヲ轉ジ攝州茨木郡高槻ノ城ヲ賜フ○三州加  
茂郡松平ノ郷主太郎左衛門在原ノ尙榮ガ長子太郎

八郎信正ニ二百石ヲ賜リ昵近ノ士ニ列セラハ信正元和  
三丁巳ノ夏早世シ跡絶ル父○高木主水正組ニテ戰  
死セシ間宮庄五郎正秀ガ子正勝時ニ十一歳ナリシ  
ヲ神君ノ御前ニ召テ則庄五郎ト稱セラレ亡父ノ  
遺迹ヲ賜リ日安藤重信ニ命ジ一族宜ク後見スベシ  
ト云ミ遂ニ二百石ヲ増封セラレ成長ノ後台徳公ヨ  
リ大阪城米ノ倉廩ノ吏ト成シ又二百石ヲ加ヘ賜フ  
是庄五郎政信力父也○大岡忠右衛門忠代カ長子忠種僅ニ四歳ヲ  
召テ同苗忠四郎忠行太坂ニ戰死シ其子ナシ汝ヲ彼  
家督トス實父宜ク養育メ成長ナサシムベキ旨命ゼ  
ラル後忠四郎ト稱○杉浦藤次郎時勝大坂ノ戰ニ左ノ掌ヲ



火炮二傷ヒ參州ノ舊郷ニ歸リ養ス後年台德公  
御上洛御歸路ニ時勝供奉スベキ旨命アル處辭退シ  
ケレバ甚御旨ニ應ゼズト云ニ○尾陽候ノ長臣渡邊  
重綱ガ次男忠七郎忠綱時十歳台德公ニ奉仕ス○間  
宮若狹守綱信ガ孤子忠左衛門重信大猷公ニ奉仕  
ス

武德編年集成卷八十九終

武德編年集成卷之九十

木村高敦撰

元和二丙辰年

正月大

○元日駿武兩營中御規式恒例ノ如シ今春ヨリ始テ  
諸臣官位ニ應ジ烏帽子狩衣大紋ヲ用ユ無官ノ御家  
人烏帽子素袍ニテ出仕ス福釜ノ松平筑後守康親ガ  
長男右京十六歳ニノ神君ヨリ御諱字ヲ賜リ從五  
位下ニ敘シ讚岐守康盛ト稱ス後筑後守ニ改○是日武城ニ  
於テ上州館林ノ城主神原康勝ガ家督國九十二歳ニ  
ノ御諱字ヲ賜リ且外曾祖父天須賀康高ニ賜フ處ノ



松平ノ御稱號ヲ直ニ授ケラレ從五位下ニ敘シ式部  
大輔忠次ト稱ス忠次後年從四位下ニ叙シ侍從ニ任ス其子刑部大輔政房以來本姓榊原  
ス後○二日東武ニ於テ夜ニ入リ例ノ諡初メアリ左  
ノ方ニ松平安房守信吉松平甲斐守忠良牧野駿河守  
忠成右ノ方小笠原右近大夫忠政松平丹波守康長松  
平外記忠實讃樂甚三郎貞代恒例ノ如ク着座スト云  
○十九日池田宮内少輔忠雄于時稱松平從四位下ニ敘  
シ侍從ニ任ズ藤堂高次從五位下ニ敘シ大學頭一任  
ズ是ハ和泉守高虎ガ子也○廿一日 神君ノ顧盼ヲ  
蒙ル呉服師茶屋四郎次郎道晴洛陽ヨリ駿府ヘ下向  
シ拜謁ヲ遂ル所ニ 神君京大坂ノ事御尋アリ道晴

聊カ異變ナシ商賈無爲ノ化ニ誘リ酒茶宴ニ耽ル且  
鮮鯛ヲ切テ栢ノ油ヲ以テ煎徹シ又熬トメ上ニ薤ヲ  
摺掛其佳味ヲ嗜ミ食フ由安リニ演說スル處榊原内  
記清久ガ久能濱ノ鯛二尾ヲ獻ジケレバ則右ノ通り  
ヲ官厨ヘ仰セ御賞味ノ上田中ノ城ヘ涉御近邊御放  
鷹アリテ東燭ノ頃彼城迄還御ノ處御腹痛甚シク片  
山輿庵法印ヲ召ケレ氏他行メ其行所ヲ辨ヘズ時ニ  
萬病圓ヲ御服用落合小平次道次ヲ以テ東武ヘ御病  
惱ヲ告ラル漸クメ與庵田中ニ來リ御氣色ヲ被ムル  
○廿二日夜陰ニ落合小平次江府ニ着シ登城ノ台  
總公怒チ御前ニ召テ御病惱ノ故ヲ問セ玉フ路次四



十里ノ行程殊ニ箱根ノ險山馬入酒勾等ノ激川ヲ越  
テ十二時ノ間ニ來ルヲ賞シ黄金時服ヲ賜フ○廿  
四日 神君ノ衛病惱微驗ニ依テ田中ヨリ駿府ノ城  
へ 還御夜陰ニ落合道次歸參ス又十二時ノ  
間ニ至ル 台徳  
公ノ御使トメ酒井備後守忠利東武ヲ發シ駿陽ニ策  
ヲ揚ル

二月小

○朔日 台徳公武江ヲ御發駕晝夜行程ヲ急ガセラ  
ル○二日申ノ刻 台徳公駿府ノ城ニ着御直ニ御對  
顔ノ處 神君ハ齡七旬ニ餘リ俄ニ重病ニ掛リ再會  
期スベカラズト歎ズ然ニ來リ玉フ此ノ如ク迅速

ニム怡悅何ヲ以テ是ニ若シト仰ケレバ 台徳公具  
情ニ堪ズ涙ヲ垂テ御退去是ヨリ晝夜憂苦シ玉ヒ寢  
食ニ暇アラズメ一向御養ノ事ヲ議シ玉ヘリ諸州  
ノ大小名ヲ召ナシト雖御不豫ノ由ヲ聞テ領國領  
邑ニ寓居スルニ堪ズ段々駿府へ來觀シ御容體ヲ見  
フト云ニ○三日阿部四郎五郎正之朝比奈源六郎重  
台徳公へ拜謁シ加藤忠廣家中ノ事總テ鎮西諸侯ノ  
事政務ノ善惡ヲ言上ス是ハ忠廣幼稚故去春以來肥  
後ノ監使トメ在國シ一昨日駿府ニ歸參スル處ナリ  
○十四日松平伊豫守忠昌ノ賓客宇都宮三郎左衛門  
朝末 兩公へ拜謁スベキ命アリト雖去夏以來腫物



今以テ平愈セサル故駿府ニ出仕スルコトヲ得ズ御扶  
助トシ黄金百兩米千俵ヲ授ケラル  
○傳テ曰是ヨリ寛永二乙丑迄毎歳米千俵ト黄金  
百兩ヲ賜フ處翌丙寅正月廿二日朝未歿シ孤子左  
近僅二歳永ク越前家ノ陪臣ニ列ス  
○廿九日水野善兵衛宗勝享年六十五歳ニシテ卒ス  
○京尹板倉勝重が羽書到來シ神君御病惱大漸ナ  
ラサル間ニ太政大臣宣下有ベシト密詔ノ趣キ  
西三條廣橋是ヲ傳ル由注進ス執事此旨ヲ速ニ高聞  
ニ達ス

三月大

○四日佐久間民部少輔勝次

大膳亮  
安次子

享年廿八歳ニシ

武江ニ卒ス○五日

神君御病惱殊ニ重シ茶阿ノ御

方ヲ召テ上總介忠輝ハ剛果勇敢ノ質自他稱譽セシ

ガ難波ノ役戦功諸將ニ超越スベシト欲スル處却テ

路次ニ遲滞シ偶然トメ鬪ニ及バス其怯弱譬フベキ

ナシト大ニ怒ラセ玉ヘバ母堂赧然トメ退カレ早ニ

越後ヘ告ラル○十五日松平石見守重綱ガ難波ノ軍

功ヲ賞セラレ五千石ヲ加恩シ玉フ本領共ニ二萬石

ト云

元和八年  
改野州烏山ノ城ヲ賜フ

○十七日

禁闕ニテ

陣ノ座ノ宣下行ハレ神君太政大臣ニ御轉任上

卿八日野權大經言弘資卿職事ハ廣橋頭辨實勝ト云

出參

武惠編

卷之四



〇廿五日松平外記忠實ヲ臥床ノ邊ニ召テ汝密  
 ミ中仙道ヲ歷テ城州伏見ニ至リ加番スベシ是深キ  
 慮有リテ命ズルノ由爰ニ於テ不日ニ忠實伏見ニ登  
 リ元和四戊午迄在衛ス〇廿六日永戸侯ノ輔臣中山  
 左助信吉從五位下ニ敘シ備前守ニ任ズ〇廿七日  
 神君太相國ノ綸命ヲ駿城ニ於テ受サセ玉フ諸臣  
 皆直垂ヲ着ス〇台徳公ヲ始メ親戚諸侯譜代ノ臣悉  
 ク拜禮ヲ遂グ〇是日或曰廿八日片山與庵法印ヲ召テ御  
 藥ヲ一貼調合サセ本多上野介是ヲ煎ジ御服用ノ處  
 忽皆吐セ玉フ斯テ台徳公ヘ命有シハ御不例ノ始  
 メヨリメ御命爰ニ極ルヲ測リ玉ヒ御藥御服用有

〇カラズト雖太樹殊ノ外御心ヲ惱サルミト上聽  
 〇又バル故御孝心嘿止ガタク御服藥有シカバ斯ノ  
 如ク御胸中ニ納ラザレバ最早無益ナル由ニテ是ヨ  
 リ御療養ニ及バレズ御臥榻ヘモ婦子ヲ禁セラレ近  
 寄フヲ得ズ無類ノ寵臣本多佐渡守東武ニテ老病ニ  
 況デ緩府ニ來ルヲアタハズト云ニ

〇或曰台徳公與菴法印宗哲ニ御療養ノ事ヲ議  
 シ玉フ處菴ガ曰常正月廿一日夜御痰涎御胸ニ塞  
 カリ危キニ至ラセ玉フ故御藥ヲ獻ジ廿四日ニハ  
 聊カ御快驗田中ヨリ還駕有シ後御腹中ニ塊有テ  
 時ニ痛メセラル是ヲ寸白蟲也トテ日ニ萬病圓ヲ



召上ラル賤臣是ヲ歎メ萬病圓ハ大毒ノ劑也御積  
塊ハ除ガスメ御元氣ヲ復スベシト諫言ヲ遂ルト  
雖御許容ナシト云々是ニ於テ昵近ノ者ヲ召テ彼  
丸藥數日御服用ト雖微癒ナキ上ハ是ヲ止テ用ヒ  
ラルニ事ナカレト諫諍スベキ由 台德公ノ命重  
シト雖日擬滯ス是ニ於テ與庵ニ台命アル故 神  
君ニ再ビ熟諫シ奉リケレバ甚ダ御旨ニ應ゼズ信  
州諏訪へ詣ヒラル 元和四年四月十四日 台德  
公渠々ニ諫ヲナス深忠ヲ憐シ  
テ取訪ヨリ召返  
シ侍地ヲ賜フ

○廿九日 勅使廣橋西三條兩亞相官務内記迄御饗  
應アリ 台德公上壇東面ニ御着座兩傳奏中壇ニ南

面ノ座ス尾州參議中將義直卿遠江參議中將賴宣卿  
水戸少將賴房卿北面メ陪侍セラル獻盃ノ次第初獻  
台德公次ニ尾州侯次ニ廣橋兼勝卿次ニ遠州侯次ニ  
西三條卿次ニ水戸侯次ニ獻ハ 台德公次ニ遠州侯次  
ニ西三條卿次ニ水戸侯次ニ廣橋卿次ニ尾州侯次ニ獻  
ハ 台德公次ニ賴房朝臣次ニ兼勝卿次ニ義直卿次  
ニ實條卿次ニ賴宣卿也 台德公ノ御給仕ハ細川大  
内記忠利并伊掃部頭直孝酒井下總守忠政鳥居讚岐  
守也兩傳奏御三家ノ配膳ハ西尾丹後守忠永佐々木  
兵部少輔義定朽木民部少輔植綱一尾淡路守通春三  
好備中守一色左兵衛範勝也時ニ 神君へ永井石造



大夫相伺フ故ハ範勝一人無位官ニメ侍從諸大夫ニ  
列シ配膳スル可如何鈞命ニ曰一色ハ足利將軍家ノ  
門葉世々實觀ノ家也諸大夫夕ラシムルハ却テ其  
家ニ不相應也今無官位ニメ此役アルハ甚規模トフ  
ベシト云々是ニ依テ渠烏帽子素袍ヲ着シ是ヲ勤ム  
己ノ刻曰リ未ノ刻ニ及デ御酒宴諸侯ニ至リ 台德  
公ノ御盃ヲ頂戴ノ間離子三番アリ所謂高石觀世大夫  
服同三是界觀世大夫ト云々 台德公ヨリ兩傳奏ヘ美服  
三十領黄金五十枚宛ヲ賜フ外記官務迄白銀時服ヲ  
與ヘラル伊達政宗去ル七日仙臺ヲ發シ今日三島ノ  
驛ニ至リケルガ駿府ニ相詰御病體ヲ窺フベキ由老

臣迄使ヲ以テ是ヲ達ス

四月小

○朔日堀丹後守直寄ヲ寢殿ニ召テ難波ノ軍功且平  
日ノ武備ヲ御稱美ノ上昔薨ゼシ後國家擾亂セバ庶  
堂ヲ以テ 大樹ノ一障トシ井伊ヲ二障トシ汝ハ兩  
隊ノ間ニ屯シ其橫ヲ打是ヲ敗ルベシ忠義懈ルベカ  
ラズト嚴命ヲ蒙ル直寄頓首メ退ク○二日執事ノ密  
旨ニ依テ伊達政宗駿府感應寺ニ至リ今日登營ス時  
ニ 神君御側ニ召テ遠來ヲ犒ヒ豫メ御遺物トメ清  
拙ノ墨蹟ヲ賜リ是ヲ頂戴シ涕泣メ退ク○三日 救  
使駿府ヲ發駕ト云々書院番頭水野隼人正忠清難波



ノ功ヲ賞シ父祖ノ舊領參州刈屋ノ城三萬石ヲ賜フ  
元ハ七  
千石也

○東武實錄曰 神君御不例故在國ノ大小名皆參  
リ集ル處越後少將忠輝朝臣ハ今以テ上州藤岡齋  
藤佐次右衛門ト云呂家ニ蟄居セラレシカバ最御  
勘氣ノ身憚リ多シト雖三島蒲原ノ邊迄來リ密ニ  
ニモ御病體ヲ伺度吉本多上野介ニ據テ願玉フ  
合德公内ニニ其意ニ任スベキト御下知アル故忠  
輝悅テ三島ノ驛迄微行シ爰ニ滞留セラルト云々  
○四日秉燭ノ後御臥榻ノ邊ヘ石川主殿頭忠總ヲ召  
テ吾汝ニ恩遇ヲ施スヲ忘ルベカラズ殊ニ昔年汝が

外祖父ニメ養父日向守家成没期其嫡孫彈正アルヲ  
以テ汝が實父大久保相模守ハ彈止ニ家成ガ跡式ヲ  
賜ハンヲヲ庶幾シ汝ヲ石川ノ家督トヒンヲヲ辭ス  
ルヲ屢也然レモ吾慮ル所以有テ汝ニ彼家ヲ嗣シム  
向後益々大樹ヘ忠勤ヲ勵ムベキ旨御遺命ヲ蒙リ其  
叔父大久保權右衛門忠爲モ同ク召テ年來ノ軍忠ヲ  
仰出サレ先年忠總カ領知濃州大垣ニテ新田ヲ開發  
ゼントスル時具事成ラバ上聞ニ達スベシ新田ニ別  
邑ヲ添テ忠爲ニ一萬石ノ地ヲ授クベキ由ヲ諭セリ  
此厚恩ヲ忘レズ彌忠ヲ竭シ大樹ニ仕フベシト上  
意ヲ蒙リ二人共ニ感涙ニ咽デ退去ス○五日松倉豐



後守重政桑山左衛門佐一晴市橋下總守長勝ヲ召テ  
去夏陣ノ功ヲ賞シ采邑五千石宛ヲ加恩セラル別所  
孫次郎友治故有テ西州ニ漂泊ス去夏ノ軍功ニ因テ  
免許セラレケルガ是又召テ二千五百石ヲ與ヘラル  
植村孫七郎ニ大和十市郡ノ内五百石ヲ加ヘタマフ  
○七日 神君ノ姫君蒲生秀行ノ後室淺野但馬守長  
成ニ嫁メ今日入興アリ是ハ 神君御病惱逐日重ク  
ナラセ玉フ故ニ婚禮ヲ急グベキノ仰アルニ因テ十  
リ○頃日 神君ハ疾既ニ篤シ扁鵲ト云氏奈何氏療  
治スルコト得ベカラズ天下ヲ平治スト云ハ待ヲ着  
メハ成ベカラス諸侯ニ隨ハサル者アラバ躬フ出馬

シ譬へ親戚世臣ト云氏忽征伐アルベシ努々小敵ト  
云氏憤ルベカラス且侮ルベカラスト 台徳公へ顧  
命ヲ垂レ玉フ然メ大小名ノ人物ヲ論セラレ加藤左  
馬介嘉明ハ太閤重恩ノ臣ト雖本國三河タル故秀吉  
在世ノ時ヨリ當家へ志ヲ竭サント欲レバ此後毛疎  
意ナカルベシ第一律義ノ質ナレバ随分哀憐ヲ加ヘ  
ラルベシ然レ氏聊ノコトモ心ニ留メ恨メル氣象ナ  
レバ其旨ヲ覺悟セラルベシト御説アリ 台徳公御  
承服有ケルガ左馬介ハ度量狭ケレバ夢々叛逆ノ心  
有ベカラザラン歟ト宣フ 神君ハ其心得不可也譬  
へバ踊ヲ催スニ少人成氏今様ヲ謠ヘル者最堪能ナ



レバ老人迄モ浮立踴躍スル者也爾世ニハ何者成  
勇烈ヲ撰テ將帥トス假令其人辭スル可也少凡衆人  
推テ是ヲ舉用ル間左馬介が度量狭シトテ油斷セラ  
ルベカラズト丁寧ニ御遺戒アリト云々○十四日或曰  
十五諸州ノ牧伯ヲ召テ曉メ曰吾老病甚ダ急ニメ命  
既ニ旦暮ニ迫レリ當時大樹海内ノ政務ヲ執玉ヘ  
バ後事ヲ以テ憂トセズ然レ氏彼政令道ニ違ノ事ア  
ラバ諸將弱ヲ國柄ヲ執ベシ天下ハ一人ノ天下ニ非  
ズ天下ノ天下也奈何シゾ恨ヲ泉下ニ含マシヤ早ク  
封國ニ歸テ大樹ノ命ヲ待テ來ルベシト乃財貨ヲ  
頗チ賜リ各領國領邑ニ歸ルベシト宣フ羣侯愁涙稔

ヲ古ノ退ク兼テ大御所薨御アラバ必三五年モ東  
武ニ抑留セラルベシト思惟スル處懸隔ノ顧命ヲ蒙  
リ實ニ聖文英武ノ德ニ歸メ毫釐モ異心ヲ含フナシ  
ト云々

○或曰福島左衛門大夫正則ヲ召テ歸國ノ暇并ニ  
名物ノ陶器ヲ御遺物トノ賜リシカバ正則モ涙ヲ  
垂レ愀然タリ其時神君ノ仰ニ頃年讒者アリ  
大樹ハ足下ヲ疑ハレ在國ヲ許サレズ長ニ滯府ニ  
及ブ然レ元ヨリ異心ナキヲ炳然タル故今度  
大樹ヲ曉シ漸ク歸國アラシムベキニ決ス早ク命  
ニ隨ヒ二三手モ緩ミト藝州ニ在テ鬱氣ヲ散ズベ



シト仰ス正則首ヲ傾テ頻ニ涕泣メ詞ヲ發スルニ  
ダモ主ラズ爰ニ於テ斯ノ如ク命ゼラルト雖大  
樹ヘ憤ヲ含メルヲアラバ歸國ノ後逆意ヲ發スル  
氏其心ニ任スベシト宜ノ左衛門太夫聲ヲ揚テ悲  
涙斜ナラス暫有テ金吾ハ何ト云ルヤト本多上野  
介ニ尋サセ玉フ處ニ正則事太閤以來聊モ疎畧ノ  
念ナシ雖今ノ仰ハ情ナキ昔恨ミ奉ル段言上シテ  
レバ 神君ハ正則ガ其詞ヲ聞ン爲ニ憫ミノ詞發  
スル由仰ヲ被リ福島欣然トメ退出ス

○重テ 神君ハ台徳公ヘ謂テ曰ハトノ政事聊モ邪  
曲ナカルベシ向ニ諸國ノ侯伯ニ告テ曰 大樹ノ政

者違フ有ラバ各國柄ヲ執ベシト云キ自然海内ノ  
侯伯逆謀有テ參勤セザル時ハ最初顧命セシ尾張遠  
江水戸ノ三家ヲ率テ出馬セラレ早速征伐ヲ遂ラル  
ベシ彼ニ家未ダ幼年也 人樹予ガ爲ニ憐憫アレト  
云ニ次ニ幾直賴宣賴房ノ三君ヘ爾ガ曹ヲ 大樹ニ  
仕ヘ或ハ賦役ニ從ヒ或ハ左右ニ給仕シ只 大樹ノ  
命ニ隨テ背フナカルベシト仰アリシカバ 台徳公  
ヲ始メ三君各泣涙メ退去セラル又成瀬隼人正正成  
安藤帶刀直次ヲ召テ汝等ヲ義直賴宣ガ輔佐トスル  
所以ハ薨去ノ後能輔翼ノ功ヲ竭シ努ニ兩卿野心ナ  
カルベキヲ欲シ玉フニアリ若クハ兩卿野心ヲ挾



ミ玉ハダ黄泉ノ下ニ汝等ヲ勘當スベキ由上意ニ預  
ルト云々○十五日神君都筑久大夫ヲ召テ三池ノ  
刀久ク殺斷セザレバ彦坂九兵衛光正ヨリ科人ヲ得  
テ是ヲ斬テ其双心ヲ言上スベキ旨御直ニ仰ヲ被ル  
故彼御腰物ヲ携ヘ御次ニ退ク處再ビ呼返サレ罪科  
愼ニ定リシ者ヲ吟味シ裁斷スベシト御詔アリ久大  
夫早速犯科人ヲ光正ヨリ受取是ヲ裁斷レ御刀ヲ持  
參シ御直ニ獻ジ實ニ雄劍トハ是ナラシ掌ノ中ニ聊  
モ覺ナク土壇迄ヘ砂引アル旨ヲ演說スル處甚御機  
嫌ニテ是ヲ御手ニ取セ玉ヒ二三度振ラセラレ此良  
刀ヲ以テ子孫長久ノ神ト仰カルベシトテ御鞘ニ納

メ置ル長サ二尺二寸半込ニ以莫耶之劍摸之中屋妙  
傳所持ト彫刻シ黑鯨赤銅雞ノ御目貫ニテ後代迄久  
能ノ御神殿ニ納ル處也○十六日御病床ノ邊ニハ  
秋元但馬守泰朝板倉内膳正重昌松平右衛門大夫正  
綱柳原内記清久晝夜ニ咫尺ノ功勞ヲ竭ス處内記ヲ  
召テ頃年台教ニ歸依シ天海僧止ト師壇ノ盟也深ク  
山王ノ神道ヲ慕フ故靈ヲ神ニ崇ヘキ爲ニ當國宇度  
郡久能ノ山中某以地ハ清淨タル故柩ヲ收ムベシ彼  
山ハ天險ノ所武田信玄ガ領分五州ノ内五箇所ノ要  
城ノ其一ナレバ府城ノ本丸ト常々思ヘリ東國ハ親  
戚世臣ノ封邑多ケレバ亂ルヲ難シ西州ハ外様ノ侯  
川修養叢書 武德編年集卷九十一



伯ノミニメ干戈動夕ヲ量ルベカラズ是ニ依テ廟塔  
ヲ西向ヨシ汝領知八百石ノ上ニ千石加恩メ祭主ト  
シ且神稅三千石ヲ掌リ其外二百石ヲ以テ僧侶四人  
ヲ置テ平日修法勤行懈ルベカラズト重キ御遺命ヲ  
蒙ルト云々○十七日 太政大臣從一位前征夷大將  
軍右近衛大將淳和并學兩院別當源氏長者家康公御  
齡七十月五歳ニメ薨去御遺命ニ  
忘レ玉フヘカ  
ラスト云々  
合衆人ヲ始家門世臣仰旗本ノ諸士ハ謂ニ及バズ萬  
民哀慟ノ甚キ譬ベキヲナシ夜ニ入テ靈柩ヲ久能山  
ニ送り奉ル本多上野介正純土井大炊頭利勝松平右  
衛門大夫正綱秋元但馬守泰朝板倉内膳正重昌榊原

内記清久後改  
照久且尾州義直卿ノ名代成瀬隼人正正成  
遠江頼宣卿ノ名代安藤帶刀直次水戸頼房卿名代中  
山錯前守信吉等扈從シ久能山ニ至テ靈柩ヲ收メ奉  
ルト云々

○世ニ傳フ 神君ノ御馬ノ舍人井出八郎右衛門  
弱歲ヨリ仕ヘ奉リ數度ノ戰場ヘ御馬ノ轡ニ付テ  
從ヒ甚ダ御旨ニ應ジ有ガタキ鈞命ヲ蒙ルヲ感激  
シ黄泉ノ供奉セシヲ欲スル由具長畔柳助九郎  
ニ達シ其詞ノ末ダ畢ラザルニ忽自殺スト云々  
○廿五日 台徳公久能山 神君ノ葬所ニ詣シ玉フ  
還御ノ刻御山下榊原内記カ宅ヘ入御御膳ヲ獻ズ土



井大炊頭利勝永井信濃守尙政侍座ス時二仲二日先  
考若干ノ世臣ノ内汝カ器ヲ撰テ重キ顧命ヲ蒙ル  
手レバ向後汝ヲ聊モ御疎畧有ベカラスト云々總  
神明經營等天海ト内記相計テ是ヲ沙汰ス  
○榊原家傳二内記清久恩遇淺カラザル故御神領  
三千石ヲ支配シ祭奠ヲ掌リタルカ元和三丁巳八  
月廿八日豆州北條ノ旅營ニテ晝寢セシ夢中ニ  
大權現ノ御示現ヲ蒙リ清久ヲ改メ照久ト稱ス同  
四戊午年五月十三日從五位下大内記ニ敘任シ同  
年六月廿四日從四位下ニ敘ス同八壬戌四月榊原  
ハ清和源氏也 綸旨口宣向後源姓ト記スベキ

御説ヲ被ル同年六月廿日從二位ニ敘ス武臣二品  
ヲ并スル人ハ柳營ノ家門ニ非ズメ邂逅ノ事也同  
年八月十二日參内昇殿ヲ遂ゲ正保四丁亥八月  
七日享年六十二歳ニメ卒ス照久二一女五男アリ  
長女ハ一色右馬助範視ニ嫁ス 是賤臣木村高敦嫡  
實母方ノ祖母也  
男越中守照久三男左馬介久重三男大膳久政四男  
左京入近五男孫十郎久道ト稱スト云々○東武實  
錄ニ 神君薨御ノ後七箇日ヲ歷テ 台徳公ヨリ  
上總介忠輝朝臣上州藤岡迄歸リ百箇日ノ後武陽  
ヘ參勤有ベキ旨命セラレ豆州三島ヨリ藤岡ヘ歸  
ラルト云々○又曰忠輝是迄駿府臨濟寺ニ寓居セ



ラレシガ、台徳公ノ鈞命ニ依テ當廿五日彼地ヲ  
發シ藤岡ニ至リ民家ニ五十四箇日寓居シ玉フト  
云ニ

○廿七日、台徳公駿府ヲ御出興ト云ニ○廿九日武  
城へ還着シ玉フ御當家累世浄土宗門タルヲ以テ武  
江三縁山増上寺ニモ先考ノ御靈屋ヲ經營セラル鋤  
飾金銀ヲ鏤メ結構崔嵬タリ日本ノ國數ヲ表メ疊々  
ト六疊ト云ニ且増上寺ニ於テモ來月中旬大法會ヲ  
遂行ハルベキ間諸宗ノ僧侶十八日ヨリ參詣諷經ス  
ベキ旨ヲ觸促シ玉フ然ル處日蓮宗ノ徒ハ大相國  
ノ御葬儀増上寺ニ決セバ是非ヲ論ゼズ命ニ隨フベ

シト雖既ニ久能山ニ 神廟ヲ定メラレシ上ハ彼御  
山ニ詣シ諷經スベキ由ヲ訴フ○是月先考ノ執事本  
多上野介正純へ上野佐野ノ邑ニ萬石ヲ加へ賜フ本  
領寺州宇都宮共ニ都テ五萬七千石餘ヲ領シ且父  
渡守正信ニ合屬ノ參州高橋ノ舊士七十騎ヲ以テ正  
純ガ與カトシ根來二百人ヲ以テ徒同心トス此給米  
總テ一萬三千石餘ト云ニ○酒井雅樂頭忠世土井大  
炊頭利勝漸ク東武ニ歸參ノ節嚮ニ 神君ノ命ニ依  
テ再ビ御家人ト成シ櫻井庄之助勝成ヲ攜へ來リテ  
台徳公へ拜謁アラシメ父ノ舊勲ヲ以テ 神君ノ厚  
キ御諒ヲ蒙ル趣キ言上ニ及ブ處ニ則勝成ヲ書院番  
出修驗叢書 武徳廟年集卷九



二列セラル後年御使番ト成ル

五月大

○四日飯尾左馬介敏宗入道平宗庵長伯享年七十八  
歳ニメ加州ニ卒ス是ハ隱岐守信宗ガ子ニメ初尾州  
奥田ノ城主ト云ニ長伯カ子左馬介改長沼氏○越後少將家遂ニ  
ハ罪ヲ蒙ラシメ玉フベキ故若クハ鉾楯ノ企アルベ  
キ歟ト 台徳公御遠慮ヲ凝サレ松平半四郎利任後  
内膳正又近藤石見守秀用ヲ上州藤岡ノ忠輝ノ旅營  
改大開テ遣ハサル先達テ 大相國百箇日御弔ノ上ニテ出  
府シ玉フベキ由ヲ告ラルト雖餘リ遅ミスル間近日  
其地ヲ發シ江府淺草ノ別墅邊迄微行アリテ御下知

ヲ待ベキ旨ヲ達セラレ諸將ニ命ジ横川ノ關ヲ警備  
アラシメ且近國ヘ江府躁動ノフアラバ武陽ノ要路  
ヲ守ルベシト密ニ令ヲ施シ玉フ○十一日銅錢ノ  
制令ヲ出サル

定

一丈うけ錢

一われ錢

一形子ト錢

一まる錢

一郭惡錢

一ちまり錢

右六錢之外ハ諸君ヘも納付間不可據之金  
子等分ニ是實久之賣買するヘ一ハ六錢  
之外據付者差押るつうふ者有らハ以明之



御書 正徳九年集川卷九

上之而二火中を押へきもの也仍所定如件

元和二年五月十一日

急度申入以所定之悪銭と路次筋等大豆賣買仁  
以之付而此等者迷惑之中に就て是道筋比  
入之新といふ事大に相渡り為る徳銭に比  
小納申以同右の時之以相場為賣徳銭を自分  
藏へ以納を以高札之案文別紙に遣り領内  
付可相定以要細者高堂金兵衛藤川庄次郎可  
演説以忍之様言

元和二年五月十一日

右ノ文體ニテ本多上野介酒井備後守土井大炊頭

藤對馬守松平右衛門大夫板倉内膳正秋元但馬守伊

丹喜之介璉署ニメ太小名へ送ルト云々○晦日池田

出雲守長常備中守長吉カ子梨子打烏帽子形ノ御冑并ニ鎧

ヲ賜フト云々○神君御在世ノ時ヨリ封セラル處ノ

駿遠五十二萬石餘參議賴宣卿後紀伊侯南莊院殿彌是ヲ領セ

ラレ駿府ノ城ニ在ル處ノ貨財殘ル所ナク尾張侯

直卿水戸侯賴房卿ト共ニ配分受用有ベキ旨命セラ

レ本多上野介駿府ニ往テ是ヲ沙汰シ金銀ノミ久能

ノ官庫ニ收ムト云々御遺命ニ依テ龍川豐前守忠往

ヲ義直卿へ附屬セラル外孫與惣右衛門直政ヲ養子トス元和八壬戌以來東武ニ

仕ム○大關彌平治政増享年廿六歳ニメ卒ス

出



武德編年集成卷九十終



